



さとのかぜ

No.174号

千葉県いすみ環境と文化のさと

2011年1月1日発行

編集・発行 千葉県いすみ環境と文化のさとセンター

指定管理者 (財) 千葉県環境財団

〒298-0111 千葉県いすみ市万木 2050 番地

TEL 0470-86-5251 FAX 0470-86-5252

URL <http://www.isumi-sato.com/>



あけましておめでとうございます。

本年も「千葉県いすみ環境と文化のさと」をよろしく願い申し上げます。

2011年の干支は「卯」ウサギですね。センターの畑にも時々、ノウサギの足跡が残されています。ことわざに「兎の上り坂」というものがあります。ウサギは上り坂を素早く登れるところから、物事が順調に進むことを表しているそうです。

長い耳は情報を素早くキャッチできそうです。それにあやかっ、環境や文化についても身近なこと・先人の知恵からヒントを見つけ出して、新しい価値観を生み出し、夢のある未来へとつなげていきたいものです。

目次 1・謹賀新年 2・センターの畑 3~4・夷隅川流域よもやま話③ 5・地球環境問題のいろいろ⑤ 6・鳥の話題③
7・センター周辺のトンボ事情 8~10・行事報告 11・行事案内 12・センターの生き物

センターの畑(秋蒔き野菜の生長)

当センターの畑では、野菜の生長過程(発芽～結実)を来館者の皆様に見て頂きたく、季節に応じた数種の野菜を栽培しています

実を付け続けた夏野菜のトマト、ピーマン、ナス、トウガラシも猛暑のためか、9月中旬には生育に陰りが見え始めたので、抜根し秋蒔き野菜の植付けを9月下旬に行いました。ハクサイ、ブロッコリー、サニーレタスは苗を購入し、カラシナ、シュンギク、ニンジン、菜花、ダイコン、カブは種蒔きからスタートしました。



種蒔きから1ヶ月位は順調に育ったのですが、それ以降は虫による葉の食害や台風の大雨により根元の土が流され、根が洗い出されたりするトラブルがありました。虫は職員が一匹ずつ捕まえ、洗い出された根は土寄せをして世話をした結果、順調に育っています。

トラブルといえば、センターの周辺にはイノシシが出没します。幸い今のところ畑は荒らされていません。イノシシの場合は畑が掘り起こされるので、作付野菜が全滅にされる可能性があるのです。イノシシに比べれば虫による食害はたいしたことはないのですが、管理する者にとっては厄介な代物です。

【食害にあった野菜】



(ハクサイ)



(ブロッコリー)

憎き虫ですが、来客者の皆様には野菜の生長と共にどんな虫がどの野菜に付くのかも知っていただきたく無農薬で育てています。

【葉、茎を食する虫】



(モンシロチョウの幼虫)



(カブラハバチの幼虫)



(ハスモンヨトウの幼虫)



(オンブバッタ)

無農薬のため、虫取り作業は容易ではありませんが、そんな中、心癒されるアマガエルを見つけました。よほど住み心地が良いらしく葉の中でどっしり構えていました。本当に愛らしいですね。



さまざまなトラブルにも負けず、カラシナ、シュンギクは11月から適宜収穫を行い、他の野菜の収穫開始も間近と思われます。特にダイコンは、12月の餅つき大会でからみもちとして参加者の皆様に食していただく為、おろし大根専用のもも栽培しました。辛みの強いダイコンに育ち、美味しいと参加者にも評判でした。



■夷隅川流域よもやま話—その③・川の形成と河口の話—

地質・地形の時間スケールは、人の一生などからするととてつもなく長い時間になってしましますが、夷隅川の形成に関連する話題を以下、並べてみます。

・三つの時間スケール

①20,000年くらい昔からの時間スケール—夷隅川源流が海岸の崖に近いわけ

千葉県の自然誌によれば、夷隅川の源流部は、「源流と呼ぶには不釣り合いに谷幅が広い。しかもその状態で海側に面しているという特異性が見られる」ということです。その理由として、夷隅川は「かつて、現在の源流部よりも上流側(海側)まで河川が存在していた。海に注ぐ小河川と太平洋の波浪による活発な浸食作用のため、上流部が削られてしまって現在のような地形になった」と考えられています。川の地形が生まれる長い時間スケールで



夷隅川源流付近の流域変遷模式図

は、そもそもの源流は海の上で、しかも浸食されて今ではなくなってしまったということです。

②3000～4000年昔からの時間スケール—九十九里浜の形成

九十九里浜は、縄文時代後期、今から3000～4000年前ころから砂の堆積が始まって、現在のように長い砂浜が広がり形成されたといわれています。

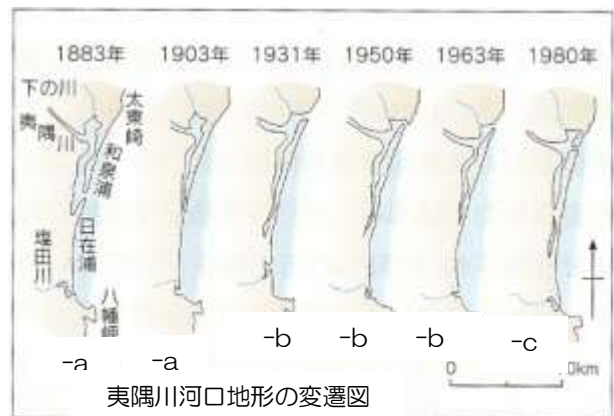
③100年くらいの時間スケール

—夷隅川河口の変遷

一方、夷隅川の河口はどうかということここ百年くらいの時間で大きな変化をしています。

-a. 明治36年の地形図では、現在の河口手前から直角に南に曲がり、三軒屋川を流れて大原手前の日在で海に注いでいました。

-b. 昭和6年、25年、38年の地形図では、今度は逆に北側に向いて灯台のふもとあたりで海に注いでいました。



夷隅川河口地形の変遷図

-c. 昭和30年代に洪水防止のため護岸工事が始まり、**昭和40年代**には、人為的にまっすぐ東に向かって海に注ぐようになりました。

-d. 平成22年、現在はどうかというと、昨年平成21年から、河口左岸の干潟の出入口部で護岸の補強工事が行われています。また、左岸干潟北端(bの旧河口あたり)の砂浜が波に洗われて薄くなり、そこから海水が直接侵入するおそれが生じています。

・干潟

太東崎灯台の崖の上から南の方向を展望すると夷隅川河口を一望に納めることができます。夷隅川河口は、その変遷を残していて海への出口手前で北にも南にも水面の広がりがあります。潟湖(ラグーン)という地形で、潮の満ち引きの影響を受ける干潟が広がるため、貝類・エビ類・多くの微生物が棲み、それらをエサとする野鳥も多く見受けられます。

干潟というところは、満潮と干潮との間で細かい砂や泥が堆積して出来上がっています。川の上流から運ばれてきた土砂と海流によって運ばれた土砂、両方の堆積と浸食の絶妙なバランスによって成立しているといえます。

夷隅川河口付近では、沿岸流の変化に伴う砂の浸食運搬堆積の変動により、砂浜の太ったり痩せたりが絶えず繰り返されています。夷隅川河口の海岸でも台風一過により、砂浜が大きく削られたり、逆に大きく膨れ上がったりと一晩の間に海岸線の変化を目のあたりにすることがあります。人にはかなわない自然のパワーを見せつけられる思いがします。

また、九十九里浜では、北端と南端で浸食が進み、その砂と川が運んだ陸からの砂とが中央部に堆積して九十九里という大きな砂浜

が形成されていると考えられています。しかし、砂を運ぶ流れも自然現象なので長い時間スケールで変化しています。バランスが崩れて砂浜がみるみるやせて行ってしまう現象が起きている部分が太東周辺でも見られます。昔は、砂浜や海岸林の奥行き、厚みがあった、とよく言われます。一方、昔の地図と比べると人間が昔より海の近くまで進出して利用していることも、砂浜がやせたと強く感じる原因になっているようです。

さて、干潟は人にとっては使いにくい泥だらけの土地と考えられ、世界各地で干拓・埋め立てが行われてきました。ところが最近になって、干潟にはとても多様な生物(プランクトン、貝類、カニ類、他特有の生き物)がいることや、干潟の生態系がすばらしい水質浄化作用を担っていること、渡り鳥にとって重要なこと、津波など災害防止効果もあること、特有の漁業資源であることなど、人間がその存在価値に気づき始めました。湿地を守るラムサール条約(1975 発効)、諫早湾の干拓と漁業問題などよく耳にする身近な話題になっています。まさしく「生物多様性」の場ですね。

日本全国でも、干潟の減少や、砂の海岸線の減少が続くことは大きな問題であると認識され始めています。砂を守る海岸護岸工事が行われているところもありますが、人の力ではかなわないところも多いようです。人というものは、身の回りに当たり前にあるものについては、なくなってきて初めてその重要さに気付くということを繰り返してしまうものですね。千葉には、盤洲干潟、三番瀬、富津

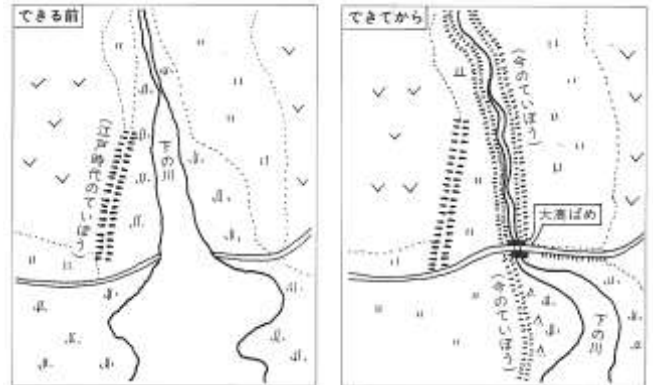


干潟、谷津干潟などが有名ですが、実は夷隅川河口や一宮川河口にもたくさんの生き物が棲む干潟があります。「日本の重要湿地 500」の中のひとつにもなっています。センターでは、来たる 2 月にそんな干潟を訪れる野鳥観

察会が予定されています。夷隅川河口は、ウミガメの産卵場所でもあり、干潟の生き物、海岸の植物、野鳥などの宝庫です。ぜひ身近な干潟を体感・再認識してみましょう。

・大高ばめ—河口の農地を守る水門

126 年前になりますが、明治 16 年の地形図では、夷隅川沿いには荒地が多く見られます。江戸時代の堤防も夷隅川の北側、現在の国道の両側に見られ、荒地湿地が広がり、川が暴れていた様子を読み取ることができます。



明治 30 年、大高玉二郎は河口荒地の開墾に着手しました。しかし河口周辺の農地は、洪水塩害に悩まされていました。そこで大正 2 年、玉二郎は私財を投げ打って村人と共に海の水の上昇を防ぐ堤防と水門の工事に着手しました。土を積み、幅 90m あった河幅をせばめて、幅 10m の水門を作るという大工事を翌年夏までかかって行い、完成後は雨の日も風の日も毎日水門の見回りを行ったということです。おかげで数十ヘクタールの水田が塩害から守られるようになりました。その水門は、明治時代に積んだ煉瓦が見られる土木遺産としても認識して見学することができます。



大高ばめ水門

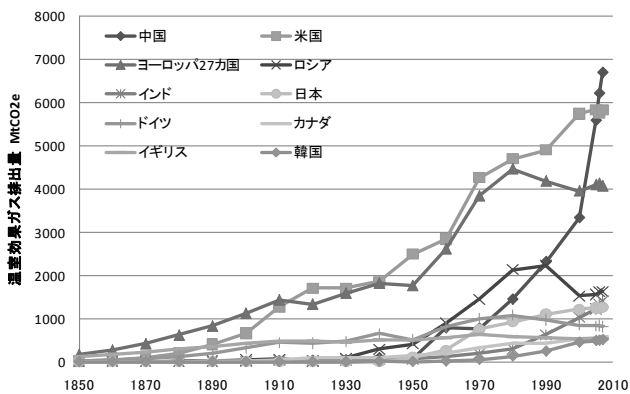
参考:千葉県自然史 2、同 8、同 別編 1、同 2、岬町史、新版 わたしたちの夷隅、

地球環境問題のいろいろ⑤ - 温室効果ガス排出量 -

昨年は COP10 だ、COP16 だといろいろありました。COP とは締約国会議 (Conference of the Parties) の略で、加盟国が物事を決定するための最高決定機関として設置されています。COP10 は生物多様性条約第 10 回締約国会議です。そしてメキシコのカンクンで行われた会議は COP16/CMP6 とも書かれますが CMP は京都議定書を批准した国の会議のことです (the Conference of the Parties serving as the meeting of the Parties to the Kyoto Protocol)。

そのカンクンで行われた気候変動枠組条約第 16 回締約国会議 (COP16) では途上国と先進国のあいだで、京都議定書の延長問題がずいぶんと議論になっていました。日本は荣誉ある化石賞を初日に頂戴しています。この会議の成果に関しては、NGO やネット、マスコミなどの論調に流されず、御自身で判断してもらいたいと思いますが、そのための手助けとして基本的なデータを今回は示します。

図は 1850 年からの温室効果ガス排出量の推移で、2007 年におけるトップ 10 の国に限って過去へ遡り示したものです。もとのデータは世界資源研究所 (WRI) の CAIT に公開されています。

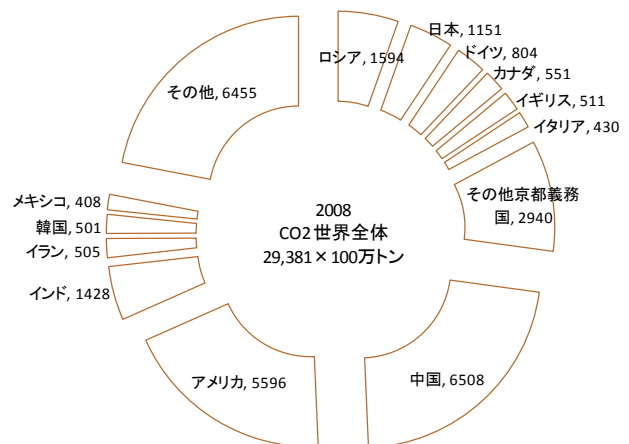


(WRI資料より作成)

第二次世界大戦以前ではヨーロッパ諸国やアメリカが多かったのですが (日本などはデータなしです)、1960 年代以降に日本や中国が増加していきます。その中であって、中国の増加は急激で、2006 年にアメリカと中国が逆転しています。縦軸の単位は CO₂e メガトンです (京都議定書に定める各種温室効果ガスを二酸化炭素に換算)。

他の資料を見てみましょう。図は国際エネルギー機関 (IEA) が昨年発表した資料をもとに作成

した、2008 年における国別二酸化炭素排出量の状況です。単位は CO₂ 百万トンです。時計回りにロシアからその他京都義務までが、いわゆる京都議定書において排出量削減が義務付けられた国々です。世界全体の排出量の 27% にしかありません。一方、中国一国で世界全体の 22%、アメリカも 19% を占めています。日本は中国、アメリカ、ロシア、インドに次いで世界第五位となっています。



(IEA資料より作成)

途上国が先進国に責任を求めるには理由があります。それは気候変動枠組条約の前文に『過去及び現在における世界全体の温室効果ガスの排出量の最大の部分を占めるのは先進国において排出されたものであること、開発途上国における一人当たりの排出量は依然として比較的少ないこと並びに世界全体の排出量において開発途上国における排出量が占める割合はこれらの国の社会的な及び開発のためのニーズに応じて増加していくことに留意し、』と書かれており、互いに認め合って条約が発効しているのです。そして「先進国と途上国はこの国々ですよ」も付属書に書かれているのです。でも、この条約を締結したのは 1992 年 6 月、リオ・デ・ジャネイロで開かれた環境と開発に関する国際連合会議でのこと、人間で言えば生まれたばかりの赤ちゃんは大学生になっています。時代とともに条約は見直されるべきと考えるのは筆者だけでしょうか。

[出典]

1. 世界資源研究所ホームページ
(<http://cait.wri.org/cait.php>)
2. 国際エネルギー機関ホームページ
<http://www.iea.org/co2highlights>

鳥の話③

●初秋から晩秋に見られた鳥

この頃は夏鳥が徐々に去って行き、かわって冬鳥が見られる時期です。サシバは9月下旬まで見られました。最終確認日には若鳥がセンター施設の北側の電線に止まって、田んぼにいるカエルを狙っていました。



(写真1 サシバ)

9月上旬にはタカの仲間似た飛び方の滑翔(かっしょう)をするキジバトが見られました。キジバトのこの飛び方はディスプレイ・フライトと呼ばれ、テリトリーを守る方法の一つと言われています。

万木堰では常連のカルガモ、カイツブリのほか9月下旬にはコガモが、マガモ、ヒドリガモ、オカヨシガモが10月下旬から見られるようになりました。ヒドリガモとマガモの一部はオスのエクリップスでした。エクリップスとは晩夏から初冬の時期のオスがメスに似た色彩になっている換羽前の状態を言います。



(写真2 マガモ)

そのほかの冬鳥ではジョウビタキが11月上旬からセンター施設付近で、ツグミも11月中旬から見られます。まだ警戒心が強いためか写真撮影に苦労します。

秋冬には猛禽類が多く見られます。11月上旬にノスリ、ハイタカの飛翔が時々見られます。ノスリは低山の林で繁殖し、冬になると平地の農耕地や川原、市街地の公園等にも出現するといわれています。ハイタカは本州以

北の山地の林で繁殖し、冬は全国的に見られるようです。

トビは1年を通して見られますが、群れで飛翔しているのはこの時期が多いようです。そのほかの猛禽類ではミサゴがいます。比較的白っぽく見え、魚を食べるワシタカですが、万木堰上空に時々出現しますが捕食している現場は確認されませんでした。

そのほかこの時期の特徴としては、カワラヒワが10月下旬から群れをつくって電線上に止まっているのを見かけます。秋、冬には川原や農耕地に群れをつくってすみ、黄色い翼を見せて飛ぶのが特徴です。また、ビンズイが北側斜面で見られました。尾を上下にふり、ジーと鳴く特徴があります。



(写真3 ビンズイ)

モズの高鳴きは秋のシンボルの1つですが、センターでは9月上旬から、11月にも聞こえます。ウグイスは年間を通して確認されますが、9月中旬から鳴き方がホーホケキョのさえずりから地鳴きになり、舌打ちのようなチャツ、チャツと鳴くのが特徴です。

●確認された野鳥 (初秋から晩秋)

アオサギ、アオジ、ウグイス、ウミウ、エナガ、オオバン、オカヨシガモ、カイツブリ、カケス、カルガモ、カワウ、カワセミ、カワラヒワ、キセキレイ、キジ、キジバト、コガモ、コゲラ、コサギ、コジュケイ、サシバ、シジュウカラ、ジョウビタキ、スズメ、セグロセキレイ、ダイサギ、チュウサギ、ツグミ、ツバメ、トビ、ノスリ、ハイタカ、ハシブトガラス、ハシボソガラス、ヒドリガモ、ヒヨドリ、ビンズイ、ホオジロ、マガモ、ミサゴ、メジロ、モズ、ヤマガラ (43種類)

センター周辺のトンボ事情～夏から秋にかけて～

2010年7月から10月下旬(ホソミイトトンボのみ5月に確認)にかけて、センター周辺及び、スポット地区でのトンボ調査を行いました。調査方法は、捕虫網にて成体を捕獲し、記録写真を撮影するというものです。

千葉県では、1999年現在、9科80種のトンボが記録されています(千葉県の自然誌 本編6)。この記録の中で、別の地域からの飛来種もしくは、水生植物などと共に人為的に搬入されたなど、実際には千葉県に定着していない種5種を除いた9科75種が、千葉県のトンボ相と考えられているそうです(千葉県RDB動物編)。今回の調査では、5科21種のトンボが観察できました。

【観察できたトンボの種類】

イトトンボ科

ホソミイトトンボ
アジアイトトンボ
アオモンイトトンボ
オオイトトンボ

アオイトトンボ科

オオアオイトトンボ
ホソミオツネイトンボ

カワトンボ科

ハグロトンボ

エゾトンボ科

オオヤマトンボ

トンボ科

シオカラトンボ
オオシオカラトンボ
ショウジョウトンボ
ナツアカネ
アキアカネ
マユタテアカネ
マイコアカネ
ヒメアカネ
ノシメトンボ
コノシメトンボ
コシアキトンボ
ウスバキトンボ
チョウトンボ

今回の調査は、夏から秋にかけて行いましたが、春先や初夏限定で出現するトンボ数も多くおり、2011年春のトンボ調査によって、更に生息種数が増えるのではと、期待が膨らみます。

今回の調査で驚いたことは、千葉県の保護上重要な野生生物の中で「最重要保護生物」に指定されている、イトトンボ科のホソミイトトンボと、トンボ科のヒメアカネの2種が観察できたことです。ただ、確認された頭数は少なく、恒久的に繁殖を続けているのか疑問を感じました。今回の調査地区から離れた場所で繁殖しているなら良いのですが…。



ホソミイトトンボ

また、エゾトンボ科のオオヤマトンボは、千葉県の自然誌によると房総半島の南には生息していないと思われていますが、センターの夏には欠かせないトンボとなっています。



ヒメアカネ

トンボと聞けば、皆さんにも馴染みのある昆虫ではないでしょうか。その中で、里地で最もなじみ深い「赤トンボ」と呼ばれる「アキアカネ」の数が昨今減ったと言われています。原因は水田環境の変化、温暖化、農薬、など様々な要因があると考えられているようです。アキアカネは今まで最も普通に見られるトンボとされているので、特にその減少を感じるのかもしれませんが、一方で、今まで愛好家以外に注目を浴びていなかった種も、ひっそりと数を減らしている現状も変わらずあるようです。センターでは、今後もトンボの動向を観察していきます。

トンボに限らず、その地域に何が生息しているのか分からなければ、対策も立てられず保護活動のしようがありません。まずは身近な場所の生き物を調べてみるころから始めてみると、新しい発見にも出会え、次の活動に繋がるのではないのでしょうか。

《 行事報告 》

9月18日

センターの谷津で自然観察



小人2名、大人2名の計4名の参加がありました。

まず湿性生態園で、水路の生き物観察を行いました。ニホンアカガエル、トウヨシノボリ、ガムシ、スジエビ、テナガエビが観察できました。

生き物観察の後は、湿性生態園の植物を観察しながらセンターへ戻り、万木堰でカワセミを観察したり、トンボの見分け方を解説したりしました。

風も心地よく吹き、初秋の自然観察日和な日に開催することができました。

参加者の方にも、自然の中でゆったりとした時間をすごしてもらえたようです。

9月26日

いも掘り・焼いも体験



大人8名、小人3名の計11名の参加がありました。当初25日開催でしたが、雨天順延となり参加者の数が減ったのが残念でした。

まず畑でサツマイモを掘りました。土がとても柔らかいので、皆さん気がつくとも手で土を掘っていました。掘り上げたいもは、デイキャンプ場に用意した燻炭を使い、焼いもを作りました。

焼いもの後は、センター内のクリ拾いを行いました。こちらはイノシシに先をこされてしまい、不作でした。いも掘りも焼いもも、楽しくて美味しかったという声がありました。

10月9日

草木染め体験



生憎の雨模様の中の開催となりましたが、大人17名の参加がありました。

まずセイタカアワダチソウの花穂を刈り取り、タマネギの皮共々洗ったら、それを大鍋で煮て染液を作りました。できあがった染液に、輪ゴムや割り箸で絞り模様をつけた、シルクと木綿の布をつけました。

今年はセイタカアワダチソウの開花が遅れ、少々予定していた色が出ませんが、材料の調達から自分たちででき、詳しい説明を受けながら作業ができるのが良かったという声が多くありました。

11月28日

米作り3・わらでおきもの細工を作ろう



大人6名の参加がありました。わら細工用に栽培した京神（キョウシン）のワラを使って、亀と馬のおきもの細工を作りました。

参加者の多くがワラを緋うのが初めてだったため、まずワラを緋う練習を行いました。最初は上手くできない作業も、だんだんと上手になり、最後は皆さん亀と馬のおきもの細工を作ることができました。

終了後のアンケートでは、ワラが緋えるようになったことに驚いたと、いった声がありました。

12月4日

つるでリースを作ろう



大人8名の参加がありました。前日の雨とは違って変わり、秋晴れの中の行事開催となりました。

挨拶が終わると早速、つるの採集にでかけました。

本日採集したつるは、クズが主で他にフジやエビヅルが少々ありました。飾り用には、カラスウリ、ムラサキシキブの果実、スギの葉、マユミの果実、ヤマイモの果実（種子）などが多かったようです。

終了後のアンケートでは、自分で材料を採集できることと、その都度説明をしてもらえることが良かったという声が多くありました。

12月11日

米作り4・もちつきをしよう



小人11名、大人21名、計32名の参加がありました。

昨年とは変わり、暖かな快晴のもと開催することができました。昨年と比べると参加者数は6人減ったのですが、収穫できたもち米は15kg増え45kgとなりました。

1回2升のもち米を蒸かし、15臼ぶんのもちをつきました。お正月用の丸もちを丸め、切りもちはのし箱を使い作りました。お昼にはつきたてのおもちをからみ餅、あんこ、きなこもちにして食べました。

今年も怪我・事故など無く無事終了することができました。

☆行事報告の詳しい内容は、センター日誌 (<http://isumisato.exblog.jp/>) にてご覧いただけます。
10月3日竹トンボを作ろう、11月20日、21日たこを作ろうは中止となりました。

◆竹かご教室—10月23、24、30、31日—

10月中旬から下旬にかけて、全4回の竹かご教室を開催いたしました。

昨年までは、連続5回講座として10月2週目から11月の第1週まで、毎週土曜日に開催されていましたが、今年は土・日曜と2日続けて、それを2週に渡って行う方法に変更いたしました。

教室で使う竹は、夷隅川沿いの竹林からマダケを参加者自ら伐り出しました。



1週目はまず竹ひご作りの練習を重点的に行いました。「ひご」とは、竹を竹割り用のナタで割り剥いで作ったひものようなもので、それを編んでかごを作ります。この作業が竹かご作りの中で最も重要なもので、なおかつ初心者には大変難しい作業です。

竹かご教室はセンター主催の行事の中で、特に人気のある行事です。そのため、複数回参加の方も多く、初心者には講師以外にも熟練の参加者がアドバイスするといった風景が見られました。

30日は台風14号の影響で、悪天候の中の開

催となりましたが、それでも欠席者は1名のみという驚愕の参加率でした。それだけ皆さん竹の魅力にとりつかれたようです。3日目にもなると、多くの参加者が実際にひごを編み始め、かごの形が少しずつ見えてきました。皆さん熱心に作業していましたが、台風の影響を考えて、この日は予定より1時間半ほど早く終了としました。

最終日の31日は、皆さん竹かごの完成をめざして、ひたすら編み続けました。初心者は、六つ目（下記写真右）と呼ばれるかごを作製しましたが、熟練の参加者の方は、講師の課題よりも工夫を凝らして、より複雑で難しいかご作りに挑戦しています。



初回参加の方も、おおむねカゴをひとつ完成されました。最後に、引き続き竹ひご作りを続けると、上手な竹ひごができるようになります、上手にかごを作れるようになります、と講師の先生から励ましの言葉がありました。

第14回 さとの文化祭

第14回さとの文化祭を11月16日～23日に開催いたしました。

文化祭に出展される作品の多くは、夷隅郡市の小学校からのものです。今年は22校から、絵画・工作・自由研究の3部門431点の展覧がありました。小学生の描く独創的な絵や自由研究、しっかり作られた工作を今年も展示することができました。

文化祭には、出展した小学生のご家族の多くが観賞にいらして、この文化祭をきっかけ

に当施設を知ったという方も多くいらっしゃいます。



他にも、一般部門では地元で活動する以下3組の団体・個人の方からの出展がありました。

- ・いすみ楊枝…竹細工 25点
- ・岬町俳画クラブ…9点
- ・陶芸…18点

こちら大変素晴らしく、多くの方が足をとめじっくりと鑑賞していました。

鑑賞後のアンケートでは、それぞれ子どもたちの個性が発揮された多くの作品を見ることができて大変満足したと、いった声が多くありました。



これからの行事案内

1月 (11月2日より受付開始)

●そばうち体験

16日(日) 10:00~14:00 定員 20名

そばを自分で打って、皆で味わいましょう。

対象：中学生以上

▲参加費：1000円

持物：ボウル(約30cm)、割烹着、手ぬぐい、タオル、寒くない服装

場所：千葉県いすみ環境と文化のさとセンター
集合後、別会場に移動



●つるでかごを作ろう

30日(日) 10:00~16:00 定員 20名

つるを使ってカゴ作りをします。山に入ってつるも取りに行きます!

対象：中学生以上

持物：鎌、剪定バサミ、軍手、長靴、山に入れる服装、弁当、雨具



2月 (12月1日より受付開始)

●水辺の鳥の観察

5日(土) 8:30~11:30 定員 20名 雨天 6日(日)

水辺にはどんな鳥がいるでしょう? 観察に行きましょう。

対象：中学生以上

場所：夷隅川河口周辺



●米作り6・わらでぞうりを作ろう

19日(土) 10:00~16:00 定員 20名

世界に一足しかない自分だけのわら草履を作りましょう。

対象：小学5年生以上

持物：植木バサミ、弁当、座布団
寒くない服装



3月 (1月4日より受付開始)

●花炭を作ろう

12日(土) 9:30~12:30 定員 20名 雨天 13日

いろいろなものを使って「花炭焼き」に挑戦しましょう。

対象：小学3年生以上

持物：軍手、うちわ、ふた付空缶箱

●早春のセンターで自然観察

26日(土) 10:00~11:30 定員 20名 雨天 27日

春の始まったセンター内で、自然観察をしましょう。

対象：小学4年生以上



いすみ環境と文化のさと

写真コンテスト開催

夷隅地域の里山とその文化を広く県民に知ってもらうため、写真コンテストを開催いたします。

《応募期間》

2010年12月1日~2011年1月25日

《募集部門》

さとの環境部門

風景や動植物など自然がテーマ

さとの生活文化部門

伝統行事や工芸、生活風景がテーマ

ファミリー部門

センターでの行事参加風景など家族がテーマ

詳しくは、センターホームページ
またはセンターまでお問い合わせ下さい。



センターの生き物たち



ウメノバラ科

原産地は中国ですが、古くから日本各地に植栽され、春を告げる花として初春真っ先に咲きます。

センターでは紅梅が多く植栽され、白梅は3本しかありません。ところが、中庭の百葉箱の前に植栽された紅梅は、白い花も咲かせます。どうやら、白梅を台木にして紅梅を接ぎ木したことにより、台木の特性が表に出てしまったようです。本来意図したことではないのですが、紅白の花が一緒に観られる縁起の良いウメの樹です。



コハクチョウノガンカモ科

コハクチョウは冬鳥として群れで渡ってきます。同じ冬鳥のオオハクチョウに良く似ていますが、オオハクチョウより体が少し小さく、くちばしの黄色い部分の形が異なります。若鳥は灰褐色をしています。

夷隅郡市のコハクチョウの飛来記録としては1985年からありますが、毎年ではありませんでした。最近は毎年記録されるようになりました。

この写真は昨年12月に、いすみ市内で撮影したものです。群れは13羽で、そのうち若鳥が4羽いました。

いすみ楊枝 —千葉県伝統工芸品—

センターでは、「いすみ楊枝」を県内外に広く紹介するため、毎月高木守人氏に実演をお願いしています。

日時 毎月第3日曜日(9:30~16:00)

場所 ネイチャーセンター

講師 高木守人氏

参加料 材料費など実費をいただきます

内容 楊枝・花入れ・茶杓作り など

編集後記

センターに来て二度目のお正月を迎えました。今年は玄関に手作りの門松を立て(去年は正月飾りだけでした)より華やかな新年を迎えることができました。これもひとえに私たちを支えてくれる周りの人たちの御協力があったのでです。

去年は、名古屋でCOP10が開かれ、生物多様性が議論されました。気候変動枠組条約会議COP16は、国家の利害が対立する場となっています。生物にとっては人間が決めた行政界も国境も関係ありません。そして生物にとって水は重要です。水の基本的な分布の単位は流域です。いろいろな環境問題も流域単位で考えよう、という流れがあります。皆さんも流域単位で環境を考えてみませんか。 所長

行事への参加申し込み、お問い合わせは、電話(0470-86-5251)、ファックス(0470-86-5252)、または、直接センター事務室にお申し出下さい。定員のあるものについては、定員になり次第締め切らせていただきます。あらかじめご了承下さい。全ての行事はネイチャーセンターに一度集合してから移動します。

*eメール可(メールアドレス:senta-sato@isumi-sato.com(すべて半角小文字です))

*行事申し込み後、都合によりキャンセルする場合は必ず早めにセンターまでご連絡下さい。

◆ ◆ ◆ 利用案内 ◆ ◆ ◆

休館日：毎週月曜日(月曜日が祝日の場合はその翌日)、12月29日~翌年1月3日

開館時間：9:00~16:30、入館料：無料

※当施設のご案内や解説などを希望される団体は、2週間前までにお申し込み下さい。